

C11a 古代・中世の日月食記録をアーカイブする

谷川清隆、相馬 充 (国立天文台)、加藤雄二 (厚木市役所)

歴史天文学は歴史的天文史料を使って、現代科学に貢献することを旨とする天文学の一分野である。われわれは、とくに、歴史的日月食、掩蔽史料を使って、過去の地球自転変動を精度良く検出することを試みている。そのための基礎史料は、もともとは歴史文献に散在する。過去の研究者の努力により、中国のデータは「中国古代天象記録綜集」(1988)、日本のデータは「日本天文史料」(神田 茂,1935)、「近世日本天文史料」(大崎正次,1994)にまとめられている。そのほか、韓国・朝鮮のデータをまとめた史料集が最近韓国で刊行された(2002)。古代バビロニア、ギリシャ、中世アラブの史料は独自に収集中であるが、Stephenson(1997)の textbook に多くが採録されている。これらのうち、日月食、掩蔽を可能な限り洩れなくデータベース化することが本研究の目的である。

「日本および中国における歴史的天文史料の信頼性吟味およびデータベース化」(平成 14、15 年度科研費)においてわれわれはすでに中国史料の一部を電子化しその結果を公開している。

(<http://yso.mtk.nao.ac.jp/~tanikawa/sakuin13.html>)

今回は、範囲を紀元 5 世紀～11 世紀として史料を電子化した。方針は以下のとおりである。

1. オップオルツァー番号にしたがって、すべての日食の皆既食帯の通る地域を書き出す。
2. 各種歴史史料から日食観測史料(文言)を書き込む。
3. 時刻付き月食史料を加える。
4. 掩蔽データを加える。

講演では、電子化された史料の一部を紹介する。